

# 刻む会

たより

NO.12

1995.3.20

長生炭鉱の「水非常」を歴史に刻む会

(代表 山口 武信)

宇都市常盤一一一九(陣内)  
0836-1211-8003



## 第四回

遺族訪日を

お迎えして

事務局 陣内 厚生

長生炭鉱の「水非常」犠牲者追悼式は、今年で四回目を数え、韓国より十一名の遺族の皆さんをお招きし、去る一月二九日に無事挙行することができた。滞在期間は二八日から三〇日までの三日間。

この催しも回を重ねることに遺族会の皆さんにとっては欠かすことのできないものとなり、また「刻む会」の私たちにも運動の自己確認の機会となってきたように思われる。今年は敗戦五〇年の節目ということで、戦争責任や戦後補償が取り沙汰される中での追悼行事であつたが、この挙行はいろいろな問題とのかかわりにおいて、そのもつ意味が重要なことを感じさせられている。

などと問われたらあまり自信がない。そこは刻む会のスタッフの人たちの協力で何かこぎつけ、予定の諸準備をまずは整えることができた。

今回来日される名簿の中には昨年「刻む会」のメンバー四名が訪韓した際に聞き取りの中で浮かび上がってきたかつての犠牲者の未亡人・千さん(八六才)がおられ、

高齢をおして参加されるところで、大いに関心を集めていた。この方は夫と共に長生炭鉱に来て、狭い炭住まいを経験され、水非常以後は捨てられたよう炭鉱を去らねばならなかつたという。私たちはこの方にお会いできるのを楽しみにしていたが、何しろ高齢であるため来日直前に病氣にでもなられなければよいがと思うことしきりであった。実は昨年の来日遺族は十一名と言っていたのが、フタをあけてみたら九名しか来られなかつたという例があるので、心配はつきなかつた。

\* \* \*

一月二八日(土)。遺族の皆さん来日の日。朝七時半出迎えのスタッフ一〇名は厚南隣保館に集合し、下関に向かつた。遺族用にはワゴン二台、井上洋子さんと私が運転する。ボートビルでは待つことしばし。

さて、今回は私自身が事務局をあづかつて二年目だったので、前年の経験から大きな予測を持つて準備に当たることができた。不安は無くはなかつたが、私の悪いクセで多忙にかまけて、つい手抜きをしてしまふものだから、周囲の人たちをハラハラさせたことと思う。また前年の反省事項がちゃんとチェックされていただろうか・・

なつかしい金永鉱会長がやっと私たちの前に来られた時は予定より一時間も過ぎていた。そこでわかったのは、遺族のうち女性四名と男性四名の方はすでに待合室に出ておられたのだ。会長以外の皆さんは初対面の方ばかりなので顔がわからず、本当に失礼してしまった。しかし問題はあと二名の方が税関でひっかかり、さらに三〇分を要したのである。とにかくあの高齢の千さんもお元気で到着されているし、三日間の滞在期間の平安を祈るのみである。

さて、大幅な時間の遅れをどうしようか。マスコミ各社には長生海岸着一〇時三〇分と予告しておいたので、待ちくたびれているに違いない。しかし、一時間以上遅れて現場に着くと人づ子一人おらず、重苦しく垂れた冬の雲がピーヤにくつつくように覆い、無気味でさえある。車を降りた遺族の皆さんは寂しい海岸に感無量の面持ちで佇み、言葉を押えておられるよう見えた。高齢の千さんが、早速昔の炭鉱の様子・・・ここには何があったといった説明をしておられた。

次は西光寺。ここは昨年訪れた時とは違つて本堂において位牌と対面、ご住職による

## <スケジュール>

◎28日(土)

7:10	
8:30	下関港入港
9:00	ロビー到着 対面
10:30	長生海岸到着
11:00	西光寺訪問
12:00	昼食 於じゅうじゅう亭
13:30	宇部出発
14:30	秋芳洞 秋吉台観光
16:00	同 出発
17:00	宿舎=宇部海員会館
18:00	夕食
19:00	打ち合わせ会

◎29日(日)

9:30	
午前中	自由時間 市内見学等
12:00	昼食 於敦煌常盤店
13:00	長生海岸着
13:30	追悼式 於長生海岸
14:30	同 終了 移動
15:00	市民交流集会 於集会所
16:00	同 終了 宿舎へ
17:00	
18:00	歓迎懇親会 於海員会館大広間
20:30	同 終了

◎30日(月)

9:40	海員会館出発 宇部市役所へ
10:00	市役所社会課訪問
10:30	市長を表敬訪問
11:00	市役所出発
12:00	山口県庁到着 昼食 於職員食堂
13:00	民生部 及び 國際交流室訪問
14:00	県庁出発 下関へ(高速経由)
15:30	下関韓国総領事館到着 表敬訪問
16:30	下関港到着
18:00	同 出港

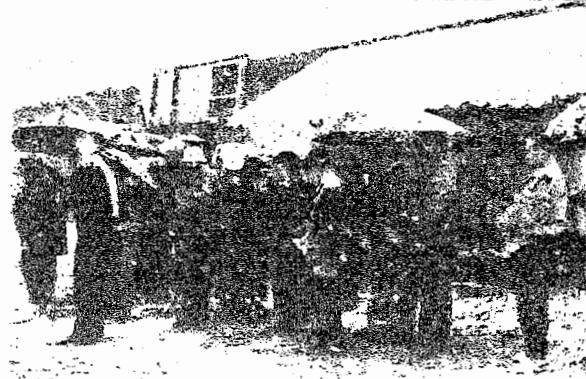
読経のあと、待ち構えていたテレビカメラのインタビューに時間をとつた。とりわけ千さんとその息子の全さんが集中取材を受けたが、思いのたけを懸命に語る姿は、歴史の証言者として堂々たる風格をさえ感じさせられるものがある。内容については他文に譲るがよくぞあの苛酷な状況の中で生き抜いてこられたものだと感慨を覚える。

昼食は中華料理店へ。実はこの日一行は時間がなく、朝食をとることができなかつたということを後で聞いて、私たちはなんとも気の毒な思いで一杯だった。せいぜいお腹を満たしてもらい、午後は秋芳洞観光に案内。旅の疲れをいやし、緊張をいくらかでもとつて戴ければと願つてのスケジュールである。言葉は通じないものの、宇部



【来日ご遺族名簿】

犠牲者	続柄	遺族
金 在成	甥	金 永鉉 キムヨンヒュン
具 守命	姪	具 必女 グ ビルニヨ
金 永根	甥	金 宗道 キムチヨンド
金 學洙		
全 聖道	妻	千 谷之 チョンコクチ
	息子	全 錫虎 チュンシカ
朴 南石	息子	朴 原奎 バクウォンギ
	甥	朴 鍾吉 バクチヨンギル
崔 陽海	息子	崔 泰雄 チェテウン
洪 相大	娘	洪 季順 ハンゲスン
	嫁	韓 在善 ハンチエソン
池 金山	甥	池 欽 チ チュルフム



に帰りつく頃には、かなり親密度が増して  
きたように思う。

夕方、在日大韓「居留民団」の会館にて  
歓迎夕食会に出席。心尽くしのごちそうを  
戴き、交流を深めあつた。夜は事務的な打  
ち合わせ会をもち翌日に備えることとした。

\* \* \*

一月二九日（日）。朝から鉛色の空模様。  
お昼近くになると氷雨となり、それが一時  
はドシャブリに変わった。遺族の皆さん  
午前中自由時間。一部の人たちが在日大韓  
キリスト教徒部教会に出席されるというこ  
ともあって、全員の方々がこれに同道され  
た。午後〇時四五分、一行を乗せたワゴン

車が長生海岸に到着した頃、雨はボタ雪に  
なり、天候条件は最悪の状況となつた。す  
でに桜井葬儀店のご好意で会場となる海岸  
の岸壁前にはテントが張られ、在日大韓居  
留民団婦人会の方々の手によつてチエサの  
準備も整つている。海岸には追悼式に参加  
しようと数十名の市民が早々と参集して下  
さつており、雪を冠りながら寒さに耐えて  
いる姿に主催者側スタッフも大いに励まさ  
れた。

夜は民団事務所のホールで夕食をいただ  
き、宿舎の海員会館に移つて懇親会のひと  
ときを共に持つた。余興に日本舞踊のご披  
露があつたり、チャーチによる民謡や、日  
本の歌謡曲など、はては酔うほどに大勢で  
いよいよ追悼式の始まる時、葬服に身を  
包んだ遺族の皆さんは感きわまつてか、波  
打ち際まで走り寄り、ピアに向かつて大

声をあげた。凍てつく海の底に眠る肉親の  
名を呼び、慟哭の叫びをぶつけるかのよう  
に。しかしその思いは雪の海にむなしくこ  
だまして、晴らされることはない。追悼式  
は定刻よりやや遅れて進められた。昨年同  
様に四〇分間にわたるプログラムのうち、  
弔辞のところへくるとなぜか涙を誘われて  
しまう。最後は一般参列者一一〇名全員が  
海辺で一輪ずつ花を献げ、無事終了した。  
この頃ようやく空が明るくなつていた。

この後は近くの集会所で市民交流集会。

\* \* \*



一月三〇日（月）滞在三日目。午前一〇時に宇部市役所を訪問。福祉部社会課のスタッフと面談を行う。もとより期待はしていないものの、遺族会よりの建議書（要望書）を提出し、回答を求めたが、かみ合うことなく肩すかしをくらつてしまつた。続いて市長室に表敬訪問、しかし市長は風邪で欠勤とのこと。助役としばらく話す中で高齢をおして来日した千さんに訴えをしていただいたが、さすがに助役も千さんの両手をとつて「ご苦労されましたね」とねぎらいの言葉をかけていた。

続いて県庁に向かう。議員食堂でキムチ持参の食事をとり、国際交流室を訪問。室長以下職員を相手の建議書をめぐる話し合

いはなかなか進展の兆しは見えない。遺族

の顔にいらだちと怒りの表情があからさまに窺える。話し合いはかなり白熱し、三〇分超過、一時間半に及んだ。結論は先送りということにして、退席して中国自動車道で一路西へ。遺族の皆さんは面白くもない役所回りのためかなりお疲れになつてゐるに違ひない。

午後四時、下関の韓国総領事館に到着。いよいよ最後のスケジュールである総領事表敬訪問と話し合いの機会をもつた。総領

事はかつて沖縄で似たような追悼記念碑を建てた経験があるそうで、その辺りの話を披露された。そろそろ時間がなくなつた。

午後五時、一行はポートビルへ。最後の交流は待合室の中で三々五々、通訳者を煩わせ意思疎通をはかる。あるいはもう通訳なしでもボディ・ランゲージで表している人もいる。短い滞在期間でご自分たちの思いを十分消化できたというわけにはいかないだろうが、しかし、少しでも心を開き合えたことは良かったと思う。遺族の皆さんとは再会を誓い、握手を交わしながらお別れした。私は「千さん、いつまでもお元気で！」と、もう一度心の中で声を出していた。

\* \* \*

こうして三日間のスケジュールは終了した。この計画のためにまずはたくさんの方々からの募金協力があり、感謝に耐えない。そして計画にあたつて実にさまざまな形で各方面からのご協力を戴き、本当に有り難かった。いろいろと落ち度があり、遺族の皆さんにご迷惑をかけてしまつたこともあろうが、今後の運動の盛り上がりを期して、今後のとりくみの中で態勢を整えていきたいと思う。

## ハルモニ長生きして

「遺族の皆さんと三日間を共にして」

井上 洋子

私にとっては、送迎用ワゴン車の慣れない運転と、日本人としての精神的な重圧でへとへとになつた三日間だつた。

二八日早朝、下関港のロビーで私達は遺族の到着を今か今かと待つたが、税関でまどり前回よりも一時間も遅れての対面となつた。その訳は秋吉観光に向かう中で明らかとなる。なにやら語尾が荒い会話がされている。どうしたのかと通訳を通じて訪ねてみると、「日本が韓国人を迎える時は韓国人はお客様ではないか、逆に日本人が韓国にきたときは日本人は韓國のお客様だ。それなのに日本の税関はわれわれに『韓国に帰れ』と言つた。それが日本に来た最初の印象だつた。実に頭にきいてる」と、言われた。私は日本と韓国を結ぶ下関港の税関のあつてはならない差別的態度を聞かされ、非常なショックを受けた。

日本の土を踏んだ遺族は日帝三六年間の支配の中で、自分や家族がまたは民族同胞が受けた屈辱を改めて思い出していたようだ。車での移動中、あるいは食事をしながら、『ニッティ』（日帝）とか、『イルボン』（日本）の言葉がたびたび耳に入つてくる。米をつくつてもすべて日本人に持つていかれ、自分達の口には入らなかつたこと、韓国の茶碗は鉄でできていたため、その生活必需品の茶碗まで日本軍は奪つたこと等、私が理解できたことは話された内容のわずかなもので、言葉の壁に何度もはがゆさを感じなければならなかつた。

二九日の午後、凍える西岐波の海岸で、



追悼式「チエサ」は行われた。みぞれまりの雪が容赦なく降りそそぐ中で、遺族は空に無念のこぶしを突きあげ、あるいは砂浜にうずくまって、「アボジ！」（お父さん）と泣きくずれた。「チエサ」の都度目の前に繰り広げられるその光景は、居合わせた日本人の心を突き刺さずにはおかないと。池（チ）さんはその砂浜の土を大事そうに袋に入れて犠牲者の故郷韓国に持ち帰つた。追悼式後に引き続き持たれた市民交流会で、お父さんを亡くされた朴（パク）さんが日本に対する弾劾の言葉を話そうとされたが、その時彼の体中に震えが起きて止まらなかつた。あれほどに心を表現する姿をかつて見たことがなかつた。その姿は彼と遺族の『恨（ハン）』と痛みを全身で表していた。彼がしゃべり始めると遺族の皆さんが多分「それ以上言うな」と口々に止めたようだつた。

今回の招請では来日遺族の中に、敗戦まで日本に住んでいた犠牲者のおくさんと息子さんがいた。まさに生き証人である。『ハルモニ（おばあちゃん）』千（チヨン）さんは、長生炭鉱の海の底に夫を奪われた時、幼い子供四人とおなかには五人目のあかちゃんを宿していた。それなのになんと

事故後会社は非情にも一家を社宅から追い出したのだ。彼女は息子の友達の家の馬小屋を借り、夫を奪った恨みの炭鉱で黙々とトロッコ押しをしながら終戦までの生活を支えた。口をきつと結んだその八五才の顔に、無骨な手にハルモニの思いのすべてが伝わってくるようだつた。

偶然にもいつしょに来日していた韓（ハン）さんのお母さんも、事故当時に五人の子供がおり、その後の生活は筆舌に尽くせなかつたと言う。すでに他界されたそうだが、生きていれば年令も千さんと同じといふ。ハルモニさんは韓さんにとつて、苦労ばかりの人生だつたという母親の姿と重なつていたに違ひなかつた。

ハルモニは三日間、日本語をほとんど使わず、いっしょに来日した息子の全（チヨン）さんを通じて話していた。まるで日本語で話すことが屈辱だと言つておられるようには感じられた。

三〇日午前中、宇部市役所のおぎなりな接待を終え、山口県庁に向かつた。時折雪が舞い、それを見て息子の全さんが、「イ・ノ・ウ・エさん、ゆきやこんこん、あられやこんこん……」と幼い頃おぼえた童謡をうたい出した。

夕方、ハルモニが日本を離れるとき、私の手に無理やりお金を握らせて……それでも頑固で拒否することは失礼に感じて受け取つてしまつたが、高齢のハルモニに滞在中に何かあつてはと気遣つたことへの気持ちだつたのかもしれない。バタバタと帰国の手続きが行われている中で、ハルモニを大事にして！」と、私の口から言葉が衝いて出た。

折しも阪神大震災の被災者の救済、遺骨の収集に全力をあげている有り様がテレビ放映されたが、金会長をはじめ遺族の「遺骨を故郷に返して」の思いは一層募るばかりだつた。

私たち「刻む会」はピーヤ（排氣筒）の保存、日本人としての謝罪をこめた「碑」の建設、資料収集の三つを目標としている。三つとも未だ一步を踏み出せず、来日のたびに遺族を失望させているという反省から、後日の事務局会では具体的な実現に向けて行動を起こすことを決意しあつた。急がねばならない。

私はもうひとつ、遺族の悲痛の叫びである遺骨の返還をこそ、この「会」がかかるべきだと強く思う。実現するためにはそれは莫大な費用がかかるし、一市民運動ができる限界をはるかに越える課題だという。しかし、たとえ可能性が一%に充たなくとも



不可能に近いから・・・という言い訳は底の底で、戦争は止めることができなかつたからという言い訳につながるようではならない。遺骨の収集は日本政府と日本人が何があつても責任をもつて成すべき課題だということを掲げ問い合わせること、今なお海の底に閉じ込められた犠牲者の現実を正視することは、戦争加害者としての意識を日本人の心に呼びますことになると思うのです。それはピーヤや碑、資料にもまして、確かに受け止めざるを得ないものではないでしょか。そしてそのことを通して、三つの目標を現実のものにする力もさらには大きくふくらむのではないかと思います。市民運動だからこそ粹にとらわれず、逆にもつと壮大なテーマとスケールをもつたものを展望することもできるのではと、今強く感じています。

山口県でもさまざまな市民運動がありましたが、この「長生炭鉱の水非常を歴史に刻む」運動は、反差別の、反戦の原点をとらえて離さないものであり、そういう意味では市民運動にたずさわっているすべての皆名を越える遺骨を放置してはばからない日本在り方そのものを、日本政府と日本人の心に問い合わせいくべきではないか。

昨年、全国で「チマチョゴリ」の女子学

生に刃物が向けられ、民族衣装がズタズタにされる事件が頻発し、朝鮮総連への警察権力の介入、弾圧がエスカレートした。まさに北朝鮮への「核疑惑」キャンペーンと時期を同じくしていた。アメリカのペリー国防長官は、一月五日のワシントンの講演で、「昨年六月、北朝鮮に核弾頭四、五発分のプルトニウムを保有されるよりは、（戦争）の危険を犯そうとして準備していた」と、戦争を実際に発動する態勢にあつた事を明らかにした。日本はそのアメリカに全面協力すると表明しているのだ。

昨年の一〇月二一日に米朝「合意」がされ、戦争の危険が薄らいだかに見えるが、これは北朝鮮をアメリカの主導でがんじがらめにくくつて、いささかでも合意を乱すことがあれば戦争的手段に訴えるというものであつて、朝鮮半島の、アジアの平和を望むものでは決してない。

このような情勢の中にあつて、私も戦争に行つた父をもつひとりのイルボンサラム（日本人）として、二度とふたたびアジアに銃を向けていたために、この運動にかかわり続けていきたいと思う。遺族と共にあつたこの三日間は、心地よい疲労と生きるエネルギーを与えてもらつたと感謝している。